帝王切開分娩における母子相互作用に関する研究

近　藤　潤　子（聖路加看護大学）

帝王切開分娩は，医学技術の進歩により苦痛も少なく施行されるようになった反面，その心理的側面が注目を浴びている。分娩は身体的に大きな労作であるが，同時に強い心理的体験でもある。この分娩の自然のプロセスをつぶさに体験し，母性としての自己概念を形成してゆく過程が重要視されている。その見地から，分娩が自然に行なわれなかったことに関連した様々な条件や状況は母親にとって帝王切開分娩の体験を心理的外傷経験へと導く可能性がある。

帝王切開分娩に伴う母親の不安や落胆，身体的疼痛，麻酔による意識の消失，および新生児の身体状況や行動特性，等は母親の分娩に対する否定的感情や育児に対する不安を増強させ，母親としての自己概念の形成を困難とする原因になりうるであろう。

一方，分娩直後の"maternal sensitive period"における母子対面・接触を，正常分娩よりも身体的侵襲が大きいためその機会を逃していることの影響も母子相互作用の観点から無視できない。

本研究は，帝王切開分娩の母子の相互作用に影響を及ぼす要因のうち，とくに母親の心理的外傷体験に焦点をあて，産褥早期における帝王切開分娩に対する母親の心理的外傷体験の性質を明らかにし，その誘因の分析を試み，それにもとづいて今後，心理的外傷体験を軽減し母子相互作用を円滑に促進するための手段の開発に役立てたいと考える。

初年度の昭和58年度は，主に従来の研究の動向を集約・分析する。とくに妊娠・分娩・産褥期における母親の心理と自己概念，心理的外傷あるいは喪失の概念，帝王切開分娩を受けた母子の行動心理学的特性，産褥早期における母子相互作用促進のための方法論，等に関する情報を収集・分析する。

昭和59年度は，前年度の研究成果から得られた基礎資料をもとに，調査計画試案の立案・プレテスト実施・調査計画の修正検討・本調査の実施，を行なう。

昭和60年度は，前年度にひきつづき，調査結果の処理，分析，考察・最終結果のまとめを行なう。

昭和58年度研究報告

帝王切開分娩の母親の心理的喪失体験に焦点をあて，過去20年の研究の動向を分析するために文献検索を行った。

帝王切開分娩の母子の身体的側面に関する研究は古くからみられるが，母親の心理的側面にとくに注目した研究は諸外国において1970年代後半から増えている。本邦においては母親の心理的特性を中心課題とする研究は数少ない。帝王切開分娩の場合は自然の分娩様式とは異なるために付加される要因が喪失の感情を招きやすいと推測される。身体的制御・body image ・意志決定・予想と現実との不一致・などから生ずる喪失が指摘されている。帝王切開分娩後の母親の出産体験に対する情緒として表出される，失敗感・抑うつ・恥・怒り・自責感・などは喪失後の悲嘆反応に類似していると示唆されている。今後の課題として，帝王切開分娩の母親はどのような心理的喪失体験をもつか，誘因は何か，ひいては母子関係への影響を考察することが掲げられる。